

ぐるっけ

平成六年七月二十七日第三種郵便物認可
平成十八年四月一日発行（毎月一回一日発行）
第十二巻第十二号（通巻第一四四号）

鈴



ぐるっけ

俳句雑誌

GLOCKE

第144号

4. 2006

苗札

品川 鈴子

苗札を記せば母の正しょう忌きなる

百年の枝葉如何にと挿木せり

白妙の繭小包の詰めものに

稿半ばにて歌垣の野に遊ぶ



野遊びに白髪乱るる誕生日

耳成の筭こうがいめきて花の雲

悼・加藤三七子様

熊野灘霞みて佳人攫はれし

句座つづき彼岸参まいりをなほざりに

西郷邸御幸のあとに枝垂梅

追はれ鬼小公園にたむろせむ



玉鈴

和歌山 宮原利代

帰郷して除夜の鐘撞く列に入る
枯野原野仏ぬつと姿見ゆ
初葉師十二神将強面
大寒の寺床の間に般若面

茨城 三輪 慶子

大雪を眺めて一日暮れにけり
雪晴れや梢の先の大烏
雪落しまだ揺れやまぬ松の枝
雪搔きの音の明るき日曜日

愛媛 村上 和子

玄関にある上等のスキー靴
家計簿に香典と書く松の内
生真面日に廻る三日の洗濯機
大枯木模写叶はざる枝の凝り

吟

大阪 師岡 洋子

頬あかし初雪の橋渡り来て
霜晴や土竜の土の新しき
仏具みな磨きあげたる年用意
風花の夢殿にをり一人なり

兵庫 八木柊一郎

さくさくと禰宜の沓ゆく寒さかな
凧揚げの声走り出す昼の月
心音の乱るる冬の枕かな
別れては祈るかたちに悴みぬ

東京 安田とし子

うなづきも言葉のひとつ懐手
鉄塔の鴉半眼に凍てにけり
久に逢ふための寒紅ひきにけり
湯気立てて伝記の頁繰りてをり
湯の町にひと待つ刻を梅探る

香川 合川月林子

メモになき品も加へて買初す
初糶に腹よりの声搾り出す
授かりしお札もそえて寒見舞
寒行に白衣の洗ひたてを着て
寒紅をさして一病かくしけり

大阪 赤木 真理

買ひ初めはチェコのホーロー欠けて錆び
値切るコツ少し心得初弘法
ストーブにみそ汁煮えて初弘法

兵庫 秋田 直己

クリスマスJALより届く当り籤
雪原の古城街道バス走る
掘出しの骨董探す年の市
集会の処狭しと小座布団
子の影が常に先行く月あかり

愛媛 足利 罇子

予告なく主宰現はる納め句座
コーヒー飲み選句ゆつくり納め句座
吹雪く夜客もまばらの高速バス
鷲四五羽砂をけとばす寒渚
重き膝リハビリもせず冬籠

愛媛 足利 徹

天を衝く杉の秀にみて寒鴉
神代よりたゞ嗚呼とのみ寒鴉
寒鴉人は飛べぬと知りぬきて
寒鴉何を思ひて首ひねる
写真機を向ければ気取る寒鴉

大阪 尼寄太一郎

吟行に手慣れのカート寺紅葉
滋賀院を辞して此岸の夕紅葉
散り紅葉厚きに胡座百羅漢
宿坊に古き國名照紅葉
西教寺先づは目で食ぶ菊御膳

薬草歳時記

(一四三) クローバ (白詰草)

八木 紀子

クローバに青年ならぬ寝型残す

西東 三鬼

爽やかな五月の風に誘われ原っぱに出た。ほんのりピンクがかった白いポンポンの様なシロツメクサが一面に咲いていた。可愛い花を摘み乍ら幸福のシンボル四つ葉を捜した。

クローバ：なんと心地良い言葉の響きでしょう。ツメクサ・白詰草・オランダゲンゲ俗称にうまごやし(苜蓿)。一般に白詰草と共にクローバの名で知られる紅紫の花で茎が高く立つ紫詰草がある。

江戸時代オランダから医療機械を運ぶ輸送箱の隙間をクローバのほし草で詰めた事から名を詰草。

原産は西アジアからヨーロッパ、アフリカ北部。四個の種子の豆果ができ夜は葉をたたみ眠る。蜜蜂に蜜を供給するまめ科のみつ源植物です。栄養価が高く緑肥や牧草に利用される一方、家畜特に羊は食べて中毒症状を起こす場合がありクローバ病と呼ばれる。本草のイソフラボン類の配

糖体が清熱し血を清める効能から煎液を癩病や精神失常の治療に用い痔瘡出血には水と酒で煎じた液を服用。

さて四つ葉の秘密は？白詰草の茎は地面を這い茎から花や葉がのびる。茎に葉の赤ちゃん「原基」がある。原基は繊細で人に踏まれたり虫が触り傷がつくと葉は三つ葉に分かれず四つ葉になる。又遣伝子の突然変異による場合もある。キリスト教で四つ葉が十字架と似ているので幸福の象徴と呼ぶ説もある。

クローバの白い花を編むと♪赤いサラファンの歌さながら鮮やかに蘇るのは幼い頃に四つ葉が見付かるときっと良い事があると大喜びし、スキップで家に帰ったこと。青春のそれは初恋成就の予感で嬉しくて胸がときめいたことです。♪恋ハ不思議ネ消エタハズノ灰ノ中カラ：しかし初恋は永久に終つてこそいつまでも心の中で美しく煌めくのは。今、もし四つ葉を見付けたら何をどう感じるでしょう。長い人生経験が冷めた心を見せるでしょうか。花輪をそっと首にかけました。

参考文献 「原色牧野和漢薬草大図鑑」

北隆社

「植物の事典」

東京堂出版

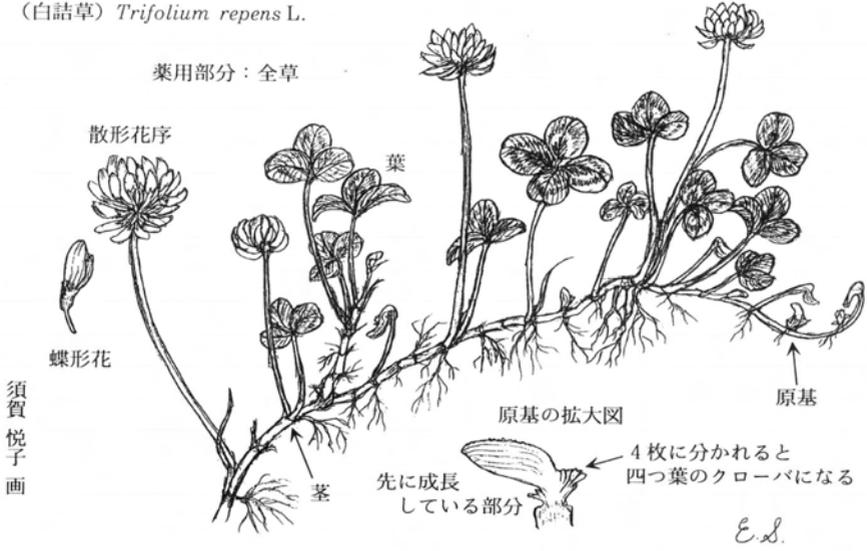
「のちゃんのふしぎ玉手箱」

朝日新聞社

著者略歴 神戸薬科大学卒

シロツメクサ (クローバ) [シャジクソウ属] (まめ科)

(白詰草) *Trifolium repens* L.



城を出て風と木椅子とクローバー	首蓓厚くてここは吾を容れ	恋なき日々うまごやし咲きはびこりぬ	うまごやし炭坑の媼婦帯を結はず	格納庫の左右の地かくす首蓓	クローバに坐すスカートの完 <small>まった</small> き円	首蓓やいつも遠くを雲とほる	鋸に乗られて支ふうまごやし	空港のクローバ溺るるほどの雨	首蓓の焼跡蔽ふことをせず
北島 明子 <small>ぐらっけ</small>	品川 鈴子	藤田 湘子	山口 誓子	横山 白虹	橋詰 沙尋	橋本 鶏二	秋元不死男	山口 青邨	石田 波郷

鈴の奏

品川鈴子選

去年今年育児日記は十冊め 香川 横内かよこ

人去りて泣き顔となる雪だるま
年酒酌む家業を継ぐと決めし子に

老の春馴れ初め話何度でも
弟の背丈気になる年男 兵庫 明石 文子

堂々と句帳を開く初電車
右折して雪の田圃に出合いけり

バス不通雪に燥ぐ下校道
太りたき子も一人ゐて雑煮餅 香川 近藤 倫子

冬田道早引けの子に声かけて
鱸酒の女愚痴とも自慢とも

着膨れし人へのど飴もらひけり
子規つけし弟子の仇名や寒椿 香川 島内 美佳

柴犬にあばたのごとく草虱
空白を埋めるおしゃべり成人式

成人式ひとかたまりの花のごと
初湯出て当直の医の顔となる 香川 辻 雅子

満員電車破魔矢はすべて天を指す

年毎に恩師美し女正月
福袋で量る己の欲深さ

大粒のチョコレート選る冬北斗 愛媛 福島 松子
取りつく島なき横顔や冬の月

熱の子に幾度も触れし冬の月
熱の子の火照りしまぶた冬堇

初晴れの宮に貼りある寄進札 愛知 市川十二代
衣擦れの音透き通る弓始

神官の沓ひかりけり御神渡
白鳥のかたまつてゐる犀川湖

口遊む歌重なりて福寿草 香川 田中真由美
母さんと呼ばれる縁福寿草

うつくしきくさめと共に乾杯す
マフラーの結び目ほどき本開く

福寿草地におろされてのびやかに 東京 中田 芳子
納税期胸につかえて落着かず

秀 鈴 記

去年今年育児日記は十冊め

横内かよこ

ここ何年かの間、育児の記録やこもごもの思いを書きとめてきた日記が、十冊も溜まった。子育ての試行錯誤は得がたい経験で、いつしか自分もベテランの母親にと育てられた実感。子宝の無い者には羨ましい限り。去年から今年も子育ての無我夢中の多忙さ、でもこれこそ生涯の充実期に他ならない。

堂々と句帳を開く初電車

明石 文子

公共の乗物で人目を憚らず句帳を開くのは、やや勇気の要ることでしょうが、今年こそ俳句に打ち込む気構えの作者は、初電車から実行に移した。いい句を授かるようにと、身構えて目を凝らしているところ。

太りたき子も一人ゐて雑煮餅

近藤 倫子

飽食の世はダイエツトが流行り、細身を礼賛する傾向で

巻頭三句 品川鈴子 評

四句〜十五句 水野範子 //

*選句は全て 品川鈴子

すが、それは大人の思い込み、発育期の子供には、痩せつぽちで丈夫かり伸びたり、背の低い時期もある。人並みに肥りたいので、雑煮餅を親があきれる程平らげる。お正月のいじらしい努力ぶり。

成人式ひとかたまりの花のごと

島内 美佳

成人式の晴れ着、若さ溢れる美男美女が、楽しそうに話したり笑ったり。中には晴れの場で緊張する方もあるが、とにかく、若さつて素晴らしい。思わずエールを送りたくなる。その華やぎをひとかたまりの花のごとと比喩、明るく新鮮で微笑ましい雰囲気、次代を担う若人に期待したい。下五の範囲が展がる。

初湯出て当直の医の顔となる

辻 雅子

新年初めての入浴、新たな気持でのんびりとしたところだが、作者の職業は医師、それとも、身内の方が医師でしょうか。その日は当直なのでリラククスもできず、着替

えもそこそこに鏡の中の顔は、もう医師としての真剣な眼指。夜中の激務に耐える姿勢迄見えてくる。初湯と医の顔の取り合わせの妙。

熱の子に幾度も触れし冬の月

福島 松子

風邪の熱でしょうか。子供が高熱を出すと親は気が気でない。付きつきりで幾度も額や五体に触れる。薬効を待ちながらはらはらする。窓には寒々と照る月、月にも祈りたい気持、一刻も早く治して下さいと。親子の情愛と願いが詠めた。この親がいるかぎりこの子は心身共安心。

初晴れの宮に貼りある寄進札

市川十二代

社寺などに、金銭・物品等を寄付した人の名前を記した紙が貼つてある。元旦の晴天に恵まれ、墨の香も新たな寄進札。その金額に驚いた事もしばしば。なかには「神具」「座布団」とか「蘇鉄」等多種、社寺にとつては有難い事。変わった寄進札も見たいもの。

口遊ぶ歌重なりて福寿草

田中眞由美

先日、友人の庭に福寿草、土筆等を見に行つた。花の少ない時期に咲く縁起のよい名の福寿草、正月用として珍重され黄色の可憐な花が朝に開き夕に閉じる。小さいが膨やかな豊かな花。思わず歌を口遊みたくなる作者の気持に共感。一緒に春の歌を歌いましょう。

納税期胸につかえて落着かず

中田 芳子

自営業商業等の方は、毎年二月十六日から三月十五日までの確定申告の期間がくると、神経がいらいら。領収証や経費、収支等、電卓の忙しい日々、わずらわしい雑用で忙しく胃の調子も悪くなる。でも申告が終わると、胸のつかえも治まりほつとなさるのでは。

神域にざくと音して霜柱

向江 醇子

厳寒、神社へお参りに。石畳から十の道筋へ入り、足跡の消えた地面を踏むと、ざくつと音がした。次々と霜柱を踏む。一種独特の音の感触を楽しむ。湿気の多い軟い土に多く重ねてできるが、太陽に当たるとくずれおれ流れる。神域の霜柱の美観に満足されたでしょう。